フィリピン大学
交換留学報告書

静岡県立大学　国際関係学部
国際言語文化学科　ヨーロッパコース
[redacted]

フィリピン大学で過ごした8か月は、非常に有意義なものでした。本レポートでは、私が留学中に感じた留学を経験してよかったと思うことを2つ、留学中に苦痛に感じたことを1つ、合計3つの事柄について報告していきます。

まず、フィリピンに留学をしてよかったと思うことから報告させていただきます。

1つ目は、フィリピンの方々の国民性です。

フィリピン大学では、5つの講義を学んでいました。それぞれの講義が週に2枠あるため、合計で10コマのスケジュールです。

講義中は日本とは異なり、学生自身が積極的に発言することが求められます。「後ろの席に座る」、「講義中に一度も発言しない」などの行為は即減点対象です。「厳しすぎる！」と思う方もおられるかもしれません。しかしながら、講義はこのやり方で進行していきます。「郷に入っては郷に従え」、ですので頑張るしかありません。この環境に放り込まれれば誰でも積極的にならざるを得ません。

しかしながら、厳しい講義のルールとは対照に、学生は優しい方ばかりです。分からないことや、つらいことがあればすぐに相談をしましょう。何でも快く引き受けてくれるのが、フィリピンの人々です。
教授も留学生の語学力のことをよく配慮してくださり、講義の内容を私が得意な「日本の文化・歴史」など、日本と関係のあることにしてくださいました。

私を含め、留学に来た人はみな、フィリピンの方々のこうした献身的な姿勢、異国の人間に対する人当たりの良さに強く感銘を受けていました。治安の悪さ等、フィリピン共和国に留学するにあたっての不安要素はいくつかあると思いますが、巷で言われているほどではありませんので、安心してください。それでも気になる、不安だという方は、私に連絡をください。留学生活がどういったものだったのかを改めて説明させていただきます。

2つ目は、自身の語学力に関してです。

私は留学前、TOEICのスコアが800点後半であり、語学力に関しては全く心配していませんでした。しかしながら、いざ留学をしてみると私の語学力は講義を受けている生徒の中で断トツの最下位でした。

後頭部を殴られたかのような衝撃を受けたことを今でも覚えています。自分がいかに「井の中の蛙」であったかを実感するよい機会となりました。

私が受けていた「English 13」の講義では、4か月で2,000ページ以上ある映画の原稿を読まされます。原稿の内容について教授から質問されても答えることができず、何度「日本に帰国したい」を思ったか分かりません。

私の想いが顔に出ていたのか、何人ものフィリピン人の学生が私に声をかけてくれました。私はこの時、「講義についていくことのできない自分が嫌いだ」、「なんでこんなに語学力に差があるのかわからない」等、思いの丈を打ち明けました。

すると、現地の学生も「ほとんど講義についていけない」というのです。自分だけが大きく遅れている、と思っていた私はこの言葉にどれだけ救われたかわかりません。確かに語学力に大きな差はありましたが、不安を抱えているのは私だけではなかったのです。

フィリピンの方々の助けを借りながら、私は「English 13」の講義の単位を無事取得することができました。あの講義の単位を取得できたこと、フィリピン人の学生と貴重な時間を共有し、たくさんの思い出ができました。

帰国後に受けたTOEICでは留学前と比べてスコアが100点近く伸び、夢の950点台を取得することができました。

私が留学中に感じた、たった一つの不満点に関して述べさせていただきます。
それは、居住環境の大きな違いです。フィリピンでは常に気候が温暖なため、シャワーからお湯が出ません。常に水で入浴を行わなくてはならないのです。

フィリピンは日本と同じ災害国家で、台風がたびたびフィリピンを直撃します。天候の悪い日は、フィリピンといえどもさすがに肌寒いです。そんな中で水しか出ないシャワーを使わざるを得ない、というのは私にとって最大の苦痛でした。
留学期間は約八か月でしたが、この「水シャワー」には最後まで適応することができませんでした。

最後にフィリピン共和国という国に関して、お話をさせていただきます。ここからはまじめな話になりますし、文章も長いです。よろしくお願いいたします。

アジアの最貧国であるフィリピン

フィリピンが貧困であり続けしまう理由を申し上げますと

1. 国内に仕事がない
2. 現状への満足
3. 縮まらない貧富の格差

の３つが挙げられます。

それぞれの理由と、国民の貧困への意識について解説させていただきます。

アジアの病人と呼ばれた途上国フィリピン

政治の腐敗で1960年代は東南アジアの病人とまで言われたフィリピンは最近でそこ目覚ましい発展を遂げていますが、それでも貧困国、途上国からは脱却できません。国民の４人にひとりが貧困です。
フィリピンで一番人気のあるハンバーガーチェーン店のジョリビーでは、お客さんに交じり履歴書を持った大学生が店頭で列を作っている姿を見かけます。フィリピンでは大卒でもファストフード店への就職が一般的です。採用されたとしても正社員ではなく半年間の期間雇用で、契約が終了すればその後の雇用はどうなるかわかりません。
フィリピンの国民の平均年齢は若く23歳となっています。同じ年代に卒業した学生がたくさんいて、就職はとても狭き門です。
フィリピンの主な産業は農林水産業です。最近はコールセンターや外資系のサービス産業も増えては来ましたが、まだまだ国民の人数を受け入れるだけの産業は成長せず、職に就けない若者が大勢います。新卒で企業に正社員として雇用されるのはランクの高い大学をトップクラスで卒業し、その後も大学院や専門学校で学ぶ一握りの若者だけです。普通に大学を卒業しただけでは縁故関係やコネでもなければなかなか仕事に就けません。最終学歴が小学校卒業でも大卒でも同じ仕事をしていることが珍しくありません。フィリピン国内ではお金を稼ぐ場所が少なく、理由は貧困層が多くお金を使わないからです。そのため１億人の国民の雇用を受け入れるだけの産業が育っていません。フィリピンでは国民の１割が海外に出て働いています。

貧困からの脱却を阻む家族愛の強さ

今の暮らしを少しでも良くしたい、そのために自立して一生懸命働く、収入を得るためにどうすれば良いか、人は試行錯誤します。
しかしながら、フィリピンでは向上心や自立心が育ちません。フィリピン大学の学生は特別です。助け合いと分かち合い、そして家族愛の強い国では誰かが何とかしてくれる、と言う他人に委ねる心が定着してしまいます。

自分が働かなくても親が食べさせてくれる、食べるものがなければ誰かに甘えれば分けてくれる。フィリピンではいくら貧困でも飢えで餓死してしまう人はほとんどいません。誰かが何とかしてくれるからです。スラム街を歩くとその現実がわかります。昼間からビールを飲みギャンブルに夢中になっている男性が非常に多く、多くの家族は一日数百円での生活を余儀なくされている貧困ですが、酒やギャンブルに夢中になっている旦那さんを抱えています。

彼らに明日の生活を豊かにしたいと言う向上心はありません。今日が楽しければそれで良い、そういった国民性なのです。日本人が時間に厳しいことと同じです。家族愛が強いフィリピンではそのような人間でも家族や親せきが支えます。

自分が頑張らなくてもなんとかなってしまう社会では、貧困から抜け出せるわけもありません。

あなたの将来の夢は?

母親はその質問に答えることはできません。何故ならそんなこと考えたこともないからです。国民の 20%以上を占める貧困層は、生活を豊かにしたいと言う向上心は箕臼です。

縮まらない裕福と貧困の差

フィリピンにもお金持ちは存在します。それも日本人が驚くような暮らしをしている裕福層です。小高い丘に建てられた豪邸には何人ものお手伝いさんが住み込みで働き、自動車は家族の人数分を保有し、運転手も住み込みで雇っています。フィリピン大学の学生の多くは、こういった家庭環境で育っている方が多いです。だから心に余裕がありますし、他人に対し快く救いの手を差し伸べてくれます。

裕福層は街には出てこないので一般庶民と会う機会もありません。裕福層は代々裕福な家庭だったり、ビジネスで成功した人、政治家などが多いです。

一方社会を知らない貧困層は限られた生活範囲で収入を得る道を模索します。

路上で物売りをする家庭の子は物売り、ゴミ山でゴミ拾いをしているスカベンジャーの子はゴミ拾い、赤ちゃんを抱えて物乞いをする母親など。教育も満足に受けていない彼らは、それ以外に収入を得る知識を持っていません。貧困の連鎖です。

裕福も貧困も、これから先変わることはないのです。すべては生まれてきた環境で決まってしまうのがフィリピンの現実です。

貧困でも幸せなフィリピン人

では、裕福だから幸せで貧困なら不幸なのか？貧困はいけないことなのか？そうではありません。貧困でもみんな笑顔で楽しそうに毎日を生きています。それは幸せの価値観が日本人とは違うからです。家族と一緒にいれて貧しい食事でも食べるものがあれは幸せと考えるフィリピンの貧困層の方々は、他人と比較した生活の向上など考えてもいません。裕福で不自由ない生活を送ってる日本人には想像できないフィリピン人の思考です。

貧困でも今日の暮らしにまずまず幸せを感じており、向上心や自立心を持たず、将来のことは考えない。これがフィリピンがいつまでも途上国であり続ける理由です。しかしながら、貧しい暮らしをしていても幸せを感じながら生きている人たちは世界にたくさんいます。日本で報道される発展途上国の貧困のニュースと現実との違いがここに如実に表れています。困窮そうな映像を切り取り、暮らしが大変だと言うコメントだけを放送するテレビ番組では現実はわかりません。

フィリピンに留学をしたいと思っておられる学生は、自分の目で直接フィリピンという国を見て、そのうえで自分が将来何をできるのかを考えていただきたいです。

フィリピン大学
交換留学報告書

[redacted]

静岡県立大学　国際関係学部　言語文化学科

3年英米コース

私にとって今回のフィリピン留学は、初めての海外、初めての寮での共同生活などすべてが初めての体験で最初は少し不安もありましたが、今では最も充実した日々を過ごしたと感じています。半年という短い期間ではありましたが、こうして振り返ってみると、想像を超える素晴らしい体験だったと思います。

もちろん、最初は楽しいことばかりではありませんでした。フィリピン英語に慣れるまでは時間がかかりましたし、劣等感にさいなまれて落ち込み、授業が終わってわからないことが多すぎてよく泣きながら復習していました。それでも絶対最後の授業までに１００％理解する！と決意して、自分の中で、先生に必ず質問すること、授業中に最低一回は発言すること、予習復習をすることを徹底的にやりました。そうすることで少しずつですが、授業の内容も理解できるようになり、試験でもベストを尽くすことができました。英語力もTOEICの点数も１００点以上あがり、自分でも驚くほど上達したと感じました。それでも自分だけの力で最後までやりきれたとは思いません。周りの友達のサポートや、先生の力ももちろんあります。自分の頑張りは、必ず誰かが見てくれているのだなとよく感じました。英語の面ももちろんそうですが、新しい環境に身を置いて自分を見つめなおしながら成長するいい機会だったと思います。

フィリピンという国が私にとってはじめての海外だったので、すべてが刺激的でした。カラフルで人々はいつもみんな歌っていて適当で、どこにでも警備員がいて、フルーツが美味しくて、東京みたいな街のすぐ隣にはスラム街があるような国です。大学内でご飯を食べていても物乞いの子供がやってきてよくしゃべりかけてきました。ショックなことも多々ありました。でもフィリピンの人はみんな明るくて優しいです。私は彼らが大好きです。帰国後もフィリピンのニュースはよくチェックしています。自分の目でちゃんと見たものは大切にできるのだ、と感じました。留学に行くと自分の世界が広がるとはよく言いますが、私は、他人事だと感じていたものがそうは感じなくなりました。「知らないことを知る」というのは、とても貴重で大切な体験です。スマートフォンをみて情報を得ることも「知る」ということになりますが、自分で行ってみて感じるものというのはそれとは比にならないくらい自分の糧になります。留学というのは「知らなかったことを知れる」とても良い機会だと思います。

私が滞在していた寮は国際寮で、フィリピン人はもちろんほかの様々な国籍の留学生も滞在していました。そこにはロビーがあり、勉強している人、談笑している人、卓球している人、ご飯を食べている人など、行けば常にだれかがいました。私はよく友達とボードゲームをして遊んでいました。全然知らない子も話しかけてくれたりして、輪に入れてよく遊びました。ボードゲームは人と人との距離を縮めてくれるものだと感じました。英語でプレイをしてわからないことがあればお互い聞いたり、自分と相手の文化の違いに驚いたり、ゲームを通じてたくさんのことを学びました。高校の時に弓道部でアーチェリーもやってみたかったので、アーチェリークラブに参加したときも先生と日本の弓道について話したり、アーチェリー用語を学べたりと意外なほどに勉強になるものがたくさんありま

した。学べる場は学校の授業だけじゃないのだと強く感じました。行動を起こして人と触れ合えば、そこには何かしら得るものがあります。自らで行動していく、これもとても大切だと思いました。

留学を辛いものか楽しいものにするかは自分次第だと思います。部屋に閉じこもっていては何も起きません。不安なことも多いかもしれませんが、自分がきちんと考えて正しいと思われる行動の選択をすれば、おのずと結果はついてきます。フィリピンでの留学は私の人生に多大なる影響をこれからも与え続けると思います。私はフィリピン留学での努力を忘れずに、これからも精進したいと思います。